

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

さいとう けんいち

氏名 齊藤 研一

産育社会史を中心として、日本中世の社会生活史の本格的な研究を目指した本論文は、その解明のための最良の史料は絵巻・曼荼羅・挿絵などの絵画史料であるとし、その不十分なところについては、古記録などの文献史料や民俗資料・文学作品などをひろく渉猟することによって補い、それらを相互に緊密に関連づけて分析・読解することによって、豊かな考察を行なっている。

本論文は二部で構成され、第一部「絵画史料による社会生活史」の五章と補論では、中世社会生活史の諸側面が、絵画史料分析によって鮮やかに分析される。たとえば『春日権現験記絵』の疫病流行の場面の分析によって、疫病の祈祷をする法師陰陽師や疫鬼の姿が図像分析によって浮き彫りにされ、絵巻などに描かれた洗濯場面や、洛中洛外図屏風などに描かれた暖簾・看板・井戸の悉皆的な分析によって、中世社会の衣・食・住の有り様が解明されていく。その絵画史料の扱いは堅実であり、論旨は明快で説得力がある。

第二部「絵画史料に見る産育の心性史」では、出産と子どもの成長、お守りや賽の河原などに見られる子どもの社会的・宗教的な位置付けなどが、同じく絵画史料の分析・読解と、渉猟した諸史料との有効な関連づけによって、六章にわたって解明されている。中世の子ども像の創出に成功している貴重な研究成果である。

このように本論文の特徴は、中世社会生活史の解明という困難な課題を、絵画史料を中心に、文献・民俗・文学諸史料を巧みに組み合わせて説得力豊かに解明していくところにある。とくに中世子ども史を論じた第二部は、子ども史に関する多くの新知見の提示に成功していると言えよう。生活史の史料は少なく、かつ研究史的蓄積も豊かではない。そうした困難な研究状況故に、章によってはさらに深い分析を要すると思われるところがないとは言えないが、しかし、絵画史料をかくも巧みにかつ厳密に分析・読解して描きだされた中世の子ども史はこれまでにない斬新性と明快性をもち、今後構築されるべき日本中世社会生活史のなかに不可欠な位置を占める成果であると評価しうる。よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当すると判断する。